



ささへるニュース

Vol.16
2017年 夏

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial
Health Foundation
笹川記念保健協力財団

ハンセン病の歴史を語り継ぐ

人類遺産 世界会議

ハンセン病を
生き抜くということ。
人類が守り
伝えてゆくべき歴史が
ここにある。

特集 **ハンセン病の歴史を人類の遺産に**

第5回人類遺産世界会議 開催／長島愛生園・邑久光明園を訪ねて

ハンセン病の歴史ウェブサイトにも、芸術作品とドキュメンタリーが新登場！／ハンセン病対策の新たな取り組み

社会的ニーズに対する取り組みへの支援／緩和ケア実践の工夫、認知症高齢者の終末期ケアガイドラインの研究

2017年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業開講式／2017 WHO 笹川健康賞は、B型肝炎対策の実践家リンチン博士に
会長メッセージ～暑中お見舞と新しい人事のお知らせ

ハンセン病の歴史を人類の遺産に

第5回人類遺産世界会議 ～ハンセン病の歴史を語り継ぐ～ 開催

一般公開日には400名を超える来場者で会場は満席となり、世界各地の歴史保存の取り組み、語り継ぎの可能性、当事者の想いについて語られました。非公開の日には、ワークショップや療養所訪問と併せ、海外15カ国約40名の参加者により今後の展開についての議論が交わされました。

開催日 2017年4月22日～25日

場所 岡山県瀬戸内市

共催 瀬戸内市

完全に失われる前に

疾病としてのハンセン病の対策は、近年になり多大な成果を上げました。そのためハンセン病は「過去の病」として見られるようになり、その記憶や記録は急速に失われつつあります。厳しい差別と偏見、科学の発展による疾病制圧、そしてこの病を生き抜いた人々の軌跡により織りなされるハンセン病の歴史は、世のあらゆる偏見と差別の問題に通じます。ハンセン病の歴史を通し、疾病、出自、障がい、宗教などがハンデとならず、誰もが自分らしく生きられる社会を考えることができます。今回の会議では、悲劇の重さを量るためだけでなく、辛さや悲しみを超えた生命の輝きの証としてのハンセン病の歴史を人類の遺産として社会全体で守り、後世に伝えていこうとする世界各国の動きが紹介されました。各国の参加者が、互いの取り組みについて存分に話し合い、そこで学んだことを自分の国における活動に実際にどう生かしていけるのかを考え、同じ目標を持つ国同士がど

のように協力し合っていけるのかについて意見を交換しました。

また、特別講演とし



中村医師の講演

て、ペシャワール会代表の中村哲医師をお招きし、「ハンセン病からいのちの水へ」と題して、アフガニスタンでハンセン病治療に携わったご経験が、どのように現在の氏のライフワークである井戸掘りにつながっているのかについて話していただきました。

かけがえのない歴史を未来に届けるために

前回の第4回目の会議では、海外20カ国のハンセン病の歴史保存の取り組みと課題についてお互いに知り、保存のために協力し合うことを誓いました。それを受けて今回の会議では、ハンセン病の歴史保存の先にある歴史継承に焦点を当て、後世に確実に語り継ぎ、ハンセン病の歴史が世界の歴史を理解する上で欠かせないも

のであることを広く認識してもらうためには実際にどうしたらよいのかについて話し合いました。

参加した海外15カ国のハンセン病の歴史保存に関わる回復者とその家族、行政機関関係者、NGO、歴史研究者たちにとって、今回の会議は、ユネスコ世界



世界15カ国（アメリカ合衆国、イタリア、韓国、ギリシャ、コロンビア、スペイン、タイ、中国、日本、ノルウェー、ブラジル、フィリピン、ポルトガル、マレーシア、南アフリカ）からの参加者たちの笑顔



世界3カ国の当事者の語り「私たちが伝えたいこと・残したいこと」

遺産、世界の記憶、国家遺産、重要文化財、芸術祭、ツーリズム、都市計画（公園・緑地計画）などの取り組みの実例について学ぶまたとない機会になりました。また、相互交流を通じ、歴史を語り継ごうとする人々が共通の課題について互いから学び合えるパートナーシップを作っていくことで、個々の団体の活動を社会全体の活動にまで広げることができることを改めて認識できた場でもありました。共催である瀬戸内市にはユネスコ世界遺産登録を目指す2つの療養所があり、海外からの参加者たちも市の積極的な取り組みを知って大いに勇気づけられたことでしょう。

歴史を救うために今やらねばならないこと

参加者による話し合いの結果、実際に歴史保存と継承を進める上で、各国が早急に取り組むべき4つの共通課題が明らかになりました。

1. 場所や建物をできる限り残そう（世界遺産登録などにより）
2. 残されたモノにもっと語らせよう

3. 回復者と第2、第3、第4世代を結びつけよう

4. もっと学術的研究を

「緊急性」という言葉をキーワードとし、これらの課題を前に、まずは各国の現状と目標を見直し、国を超えた地域ネットワークや活動組織づくり、バーチャル博物館やツイッターなどの情報発信ツールの開拓と活用、NGOや歴史保存団体などとの協力関係づくりに取り組んでいくことを誓い合いました。当財団は各国の実際の活動支援を行うとともに、それぞれの課題解決に果たしうる役割を提案していきます。ハンセン病を生き抜いた人々の歴史はもちろんのこと、それらを守り伝えていこうと努力している人々の思いや願いも伝わっていくことで、より多くの人々に今私たちが生きている世界をもう一度見つめなおしてもらうことを強く願っています。



誓いの署名ボードにサイン

コラム

ハンセン病の歴史を語り継ぐ国々

今回の会議で紹介されましたが、ユネスコ「世界の記憶」への登録を目指すフィリピンクリオン島のミュージアム&アーカイブ、世界遺産登録を目指す日本の瀬戸内市内2療養所やコロンビアの療養所など、主に世界遺産を中心とした取り組みが各国で行われています。その中で、世界の記憶に登録されているノルウェーのベルゲンハンセン病博物館と並んで、すでにユネスコ世界遺産国内候補になっているのが、ギリシャのクレタ島東部に位置するスピナロンガ島です。クレタ島にはかねてより多くのハンセン病にかかった人々がおり、2カ所のハンセン病村が確認されたため、20世紀初め、スピナロンガ島はクレタ共和国によってハンセン病コロニーに指定され、隔離の島となりました。その後、隔離法は廃止され、現在は、ギリシャ文化庁により島全体が歴史遺産として保存され、観光地として多くの人々を惹きつけています。イギリス人作家、ヴィクトリア・ヒースロップの小説『封印の島』の舞台としても有名です。



ギリシャ：スピナロンガ島



島内にある当時の病院跡

長島愛生園・邑久光明園を訪ねて *療養所訪問クルーズツアー* (4月25日)

隔離の島となった瀬戸内海の長島にある2国立療養所を訪れました。
海外からの参加者たちは、日本の隔離の歴史をたどることができました。

11:00



長島への船での入所者の語り

長島愛生園入所者の方のお話を聞き、日本の隔離政策の徹底ぶりには驚くばかりでした。

邑久光明園慰霊塔にて

フィリピン人回復者の方が献花。記憶に残るシーンでした。

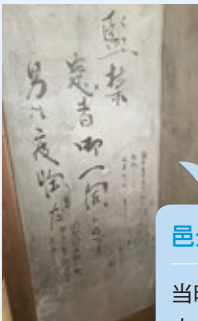
9:30



13:00



12:00



邑久光明園監禁室

当時の入所者の手書きがいまも残されている壁。胸がいっぱいになりました。

長島愛生園歴史館

故入所者の方が創ったというジオラマの素晴らしさにびっくり!

一日の見学を終えて

歴史館の前で最後に記念撮影。皆でここに来て本当に良かった!

16:30



ハンセン病の歴史ウェブサイト、芸術作品とドキュメンタリーが新登場!



ハンセン病の歴史ウェブサイト <http://leprosyhistory.org/>

を生き生きと伝えることができるように、新たに、世界各国の当事者のみなさんや一緒に生きてこられた方々の芸術作品、また、その体験を記録したドキュメンタリーフィルムを紹介するページを創設しました。

されています。

ドキュメンタリーのページでは、当財団が協力して制作した1時間ほどのマレーシアの家族再会ストーリーや、5分ほどの中国のボートに暮らす回復者や全盲ながらも竹細工を作り生計をたてている方の生き方を紹介したもののなど、長短双方の映像フィルム7本を紹介しています。

この新しい試みから、歴史の中を生き抜いてこられた方々のメッセージを届け、その歴史からの学びを継承していくことに貢献していきたいと思えます。

これからも、さらに世界各地の作品を紹介していきますので、どうぞご覧ください!

ILA (国際ハンセン病学会) ハンセン病の歴史ウェブサイトは、昨年1月末にリニューアルして以来、多くの方にご利用いただき、現在では20,000件を超えるアクセスをいただいています。これまでの世界のハンセン病の歴史に関する情報のソースとして活用されるだけでなく、そこに生きた方々の声

芸術のページでは、日本国内から、ハンセン病療養所自治会ならびに入所者の皆さま、国立ハンセン病資料館からのご協力を得て、絵画や音楽、陶芸、写真など多岐にわたるジャンルの作品231点を、海外からはコロンビアやロシア、中国などから、油絵や書道など92点を収集し、紹介しています。これらは、国名や作者、ジャンル、制作年などの各種作品情報から検索できるように、データベース化

ハンセン病対策の新たな取り組み

5月30～31日、インド・デリーの世界保健機関南東アジア地域事務所 (WHO SEARO) で、ハンセン病の診断、治療、予防に関する専門家グループ会議が開催されました。

会議の目的は、新しい診断、治療、予防法の研究結果を検証し、日常業務の中で使用可能な方法として推奨すべきか否かの判断をする、というものです。専門家グループには、細菌学者、疫学者、医療経済学者、国のハンセン病対策担当官などに加え、ハンセン病の回復者も専門家として含まれていました。

WHO発表の最新の統計(2015年)によれば、同年の世界の年間新患者数は210,758人です。10年前の2005年には286,063人でしたので、この間に約4%の穏やかな減少を示していますが、2000年前後の急速な減少と比べると停滞感は否めません。現在の対策活動が維持され4%の減少が続く場合、今後革新的な対策方法を導入せずとも、約140年後には患者はゼロになると言われています。しかし、ハンセン病に対する関心はさらに薄れ、それに伴い予算規模、経験を積んだ専門家も減っていくと予想される

ので、4%の減少率を維持することは困難と思われます。今回の会議ではこうした現状を鑑み、4つのテーマが検討されました。

一つ目は、誰でも正確に診断できるELISA(抗原/抗体反応を利用した検査方法)やPCR法(DNAによる検査方法)を利用した診断法です。現在、ハンセン病の診断は初期症状である斑紋により行っており、技術と経験が求められます。より簡便で正確な診断法は、制圧に大きく貢献すると期待されます。

二つ目は、菌の多少によらない共通の治療法です。ハンセン病の治療は多剤併用療法(MDT)と呼ばれ、3種の抗生剤を内服しますが、少菌性と多菌性では、抗生剤の配合と服用期間(6～12か月)が異なります。共通の治療法(U-MDT)では、同一配合MDTを6か月服用します。菌の多少の区別をする必要が無いので診断を容易にし、服用期間が短くなることで患者の負担軽

減が期待されます。

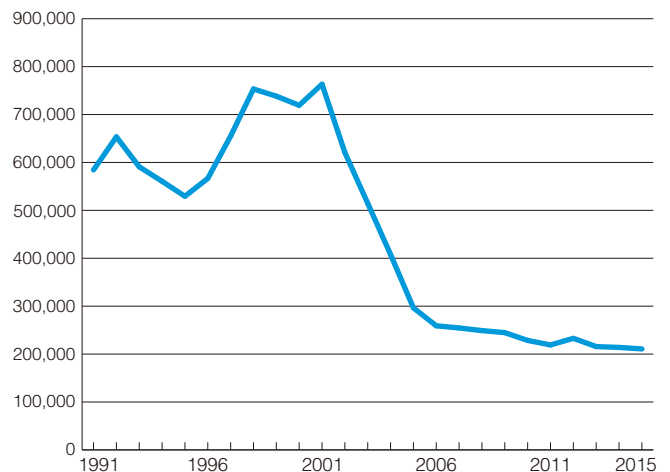
三つ目は、らい菌の感染や感染しても症状発現を防ぐ予防法です。抗生剤リファンピシンの内服やBCG接種による効果が研究されており、今回の会議でも検討されました。予防法が実現すれば、制圧への貢献は言うまでもありません。

四つ目は、将来避けては通れない薬剤耐性菌出現への対策です。現在のところ、MDT治療への耐性菌の問題は極めて小さいとのことですが、WHOでは耐性菌調査専門家グループを編成し、注意深く観察を続けています。

いずれのテーマも、制圧への貢献が期待されるものでしたが、回復者からは、研究中の予防法が偏見・差別につながる可能性や短い治療期間による治療の確実性への危惧が指摘され、十分なエビデンスを提出するようにとのコメントがされました。今回の検討結果は今年中には公表されるとのことです。



WHO SEAROにて



世界の新規患者数の推移

社会的ニーズに対するテーマの取り組みへの支援

助成金交付式の開催

当財団では、日本におけるホスピス緩和ケアの向上を目的として、医療従事者を対象とした研究助成や人材育成、一般社会に対する周知・啓発を中心としたプログラムを行っています。

2017年4月10日(月)、2017年度助成金交付式を行い、助成者45名へ決定通知書を手渡しました。当財団会長(現・最高顧問)の紀伊國献三は、「人生の最後をいかに過ご

すかが大きな課題であり、日本の緩和ケアのために助成金を有効に使ってほしい。」と述べました。

研究助成では、患者のQOL向上、小児緩和ケアの充実、精神科病院における緩和ケア、辺境地での在宅看取りの実態調査など、少子高齢化社会における有意義な研究に対し、支援を行います。地域啓発活動助成では、一般市民に対する情報発信、医療者による相談のためのカフェ運営、過疎地におけるスカイプを使った相談など、独創的な

活動が行われます。

人材育成では、1年間の専門研修を行うホスピス緩和ケアドクター研修、看護師の大学院進学のため、そして海外でホスピス緩和ケアの実践を学ぶ研修への支援を行います。

これら助成者の方には来年度の助成者報告会(下段参照)で、その成果を発表いただきます。

助成者研究課題等の詳細は、財団ホームページ(<http://www.smhf.or.jp/hospice/grant/>)をご覧ください。

助成者内訳一覧表

事業名	人数
ホスピス緩和ケアに関する研究助成	17
地域啓発活動助成	15
ホスピス緩和ケア従事者に対する海外研修	2
大学院進学のための奨学金支援(継続)	3
大学院進学のための奨学金支援(新規)	3
ホスピス緩和ケアドクター研修	5
合計	45



研究助成者と記念撮影

緩和ケア実践の工夫、認知症高齢者の終末期ケアガイドラインの研究

助成者報告会の開催

2016年度ホスピス緩和ケア事業における助成者報告会を2017年6月10日(土)に開催、発表者ら70名余りが参加しました。

まず、がん患者の最期を迎えるまでのケアの質を高く保つための評価の研究、また認知症高齢者が最期までその人らしく生きることを支えるケアのガイドラインについての研究など、研究助成21名による口頭発表、続いて地域啓発活動助成・

奨学金支援・海外研修助成者15名に対する質疑応答を行いました。

コメンテーターである筑波メディカルセンター病院代表理事の志真泰夫先生からは、「緩和ケアについて、海外からの輸入はそろそろ終わり、これからは日本の文化や価値観を含めたアイデアを持って海外との共同研究を進める時期だ。今日の発表には、それに値する研究の芽があるような気がした。」と成果を評価くださいました。

助成者の皆さまには今後、ぜひ



志真泰夫先生からのコメント

それらの視点を持ちつつ、各々の成果の活用を見据え、取り組んでいただきたいと思います。

2017年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業開講式

地域に根差した在宅看護事業所を企画・運営できる経営力をもった看護師の育成を目指す「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業は、6月5日に開講式を行い、4期生15名を迎えました。

冒頭、本事業を全面的に支援くださっている日本財団の尾形武寿理事長より、「これまでに開業した先輩たちとのネットワークを生かし、業を興すという大きな挑戦に立ち向かってほしい。そして残された人生を自宅で過ごしたいという療養中の人々や高齢者の望みを叶えるべく、

インクルーシブな社会を一緒に作りましょう。」と祝辞をいただきました。

受講者代表からは、「修了式には、看護力の増強はもとより、経営力・判断力・コミュニケーション力・コーディネート力を十分修得し、またそれらを行って、地域に根差した在宅看護事業所を開設し、多



受講者代表のあいさつ

職間協調も視野に、人々が必要とする看護を365日24時間提供することを声高らかに約束



15名の挑戦者たちを迎えて

職間協調も視野に、人々が必要とする看護を365日24時間提供することを声高らかに約束

これから8か月の研修が始まると同時に、現在35カ所に開所した修了生による「日本財団在宅看護センター」は今後もネットワークの全国拡充を目指します。

2017 WHO笹川健康賞は、B型肝炎対策の実践家リンチン博士に

WHO 笹川健康賞は1984年に、当時のWHO事務局長ハーフダン・マーラー博士と、当財団の初代会長笹川良一氏により、世界の人々の健康増進のためのプログラムやプライマリ・ヘルスケアにおいて顕著な貢献をした方々の功績を讃えるために創設されました。それから33年、今年の実績者には、モンゴルでB型肝炎の予防に取り組んだ医師アルスラン・リンチン博士が選ばれました。

B型肝炎は生命を脅かす可能性のある肝障害を起こすウイルス感染症で、感染者の血液や、その他の体液に接触することで感染します。2015年現在、推定で2億4,000万人が慢性的に感染していると言われており、今日でも世界的に大きな健康上の問題となっています。1981年頃に開発されたワクチンを使用することによって、現在は予防が可能ですが、リンチン博士は、B型肝炎に対する効果的な公衆衛生政策のない1970年代初頭から、B型肝炎の研究、特に診断の決め手となるHBs抗原の研究に熱心に取り組みま

した。モンゴルを含む東南アジアは肝炎の蔓延地域でしたが、モンゴルでは、リンチン博士の貢献で、比較的早い1991年に乳児へのB型肝炎予防接種が開始されました。

また、授賞式の日本財団笹川陽平会長のスピーチでも触れられましたが、リンチン博士は医学面のみではなく、肝炎に対する社会面の問題である偏見・差別の解消のためにも大いに尽力されており、ハンセン病問題を人権問題として解決に取り組んでいる財団としては大いに勇気づけられることでした。

残念ながら急用のため、リンチン



毎年ジュネーブの国際連合欧州本部で行われる世界保健総会の席上での授賞式（左から笹川陽平日本財団会長、チャンWHO事務総長、ツォグツェツェグモンゴル保健大臣、第70回世界保健総会議長スクヴォルツォワロシア保健大臣）

博士は授賞式に出席できませんでしたが、ツォグツェツェグモンゴル保健大臣が、トロフィーの受領とスピーチの代読をなさいました。

暑中お見舞と新しい人事のお知らせ

あちこち豪雨禍や地震の報道、皆さま、ご無事で恙なくお過ごし下さっていることと願います。

さて、今更ですが、公益財団法人笹川記念保健協力財団には、国際的なハンセン病対策、在宅・ホスピス・緩和ケアに関する人材育成、そして世界の公衆衛生活動支援の大きく三つの柱があります。それまで、各部門で、やや独自に行っていた広報活動を統合した旬刊の「ささへる」を発行するようになって早3年の時間が流れ、第16号となる今回では、少し大きな人事異動をお知らせさせていただきます。

去る2017年6月16日評議員会で、理事長に佐藤英夫（前日本財団常務理事）、常務理事に南里隆宏（跡見学園女子大観光コミュニティ学部准教授）を迎え、常務理事二人（十八公宏衣と松本源二）は顧問に、会長（紀伊國献三）は最高顧問に、前理事長（喜多悦子）は会長に異動致しました。なお、名誉会長日野原重明はそのままです。

新人事は、必ず、新たな考え方や方針をもたらします。それは直ぐに成果につながるものでないこともありますが、私どものそれは、じわ〜と効いて、良い効果が出てくるものと思し召し下さい。何故かと申しますと、これまでの財団活動を担ってきた人々が顧問、最高顧問として、いささかのお目付け役を担える新人事であり、新たな改革とともに財団の核的歴史の流れから逸脱することは防止できるからと申しあげます。

これまでの会長は、名誉会長とともに、大所高所から全体を見守っていましたが、その機能は、新たに最高顧問を含む顧問職3名と名誉会長が担います。その中、理事長として4年を務めさせて頂いた喜多は、今しばらく、実務従事を許された会長として、主に在宅・ホスピス・緩和ケアプロジェクトに関与するとともに、このご挨拶欄も引き続き担当致します。

主に海外活動の多いハンセン病対策事業、国内活動を主とするケア関連事業、そして広く世界の公衆衛生活動支援の3本の柱は、新体制の下、再々度、磨き直しますので、今後とも、変わらぬご支援をお願い致します。

何はともあれ、酷暑のシーズンです。華麗な夏、充実した夏季休暇をお楽しみになられるかと存じますが、皆々様、くれぐれも、ご健康にはご留意を。



会長 喜多悦子

マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまな事業を安定して継続していくために、マンスリーサポーターを募集しています。みなさまのご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただくことができます。

ご寄付いただく活動分野と口数をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただけます

一口1,000円/月をお好きな口数で

*寄付金額の変更、停止はいつでも自由にできます。当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団の[ホームページ](#)→[ご支援ください](#)→[マンスリーサポーター](#) (<http://www.smhf.or.jp/>)をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/会長ブログ/財団ブログ（ハンセン病対策事業/ホスピス緩和ケア事業/公衆衛生向上のための事業）
URL：<http://www.smhf.or.jp/> facebook：<https://www.facebook.com/smhf.tokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」：年4回発行

チームささへるニュース Vol.16 2017年夏発行
発行元：公益財団法人 笹川記念保健協力財団
発行人：喜多悦子
編集：チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局（笹川記念保健協力財団内）
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電話：03-6229-5377（代表）FAX：03-6229-5388
EMAIL：smhf@tnfb.jp URL：<http://www.smhf.or.jp/>

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION